吉野川お散歩紀行

吉野川学んで、
知って、出会い
マップ

2016年7月から連載が始まった「吉野川お散歩紀行」。約２年間、吉野川をとりまく魅力、文化、歴史、農産業、イベントなどを紹介してきました。取材をしていく中で大切にしてきたことは直接、現地に行き、人と会って話を伺うということです。その場所に行ったからこそ感じられること、知ることがあります。吉野川流域のまちをめぐり、お話を伺った方は、誌面に出ていない方を含めて130人以上になります。みなさんのお話と笑顔で元気になりました。

連載の間にも色々な出来事がありました。吉野川上流では、日本国内で初めての開催となった「世界ラフティング選手権2017」が開催され、今年の２月号でじっくりと案内していただいた「にし阿波地域」は2018年3月9日に『世界農業遺産』に認定されました。

NPO法人新町川を守る会理事長の中村英雄さんは、「吉野川まるごと博物館のようなものが今回の『Ourよしのがわ』をきっかけにできたらいいなと思っているんですよ」と話してくださいました。今回はマップ形式で今までの２年間の一部を凝縮して紹介します。

吉野川 お散歩紀行 総集編 学んで知って出会いマップ

お散歩紀行で訪れた吉野川流域それぞれのまち。
吉野川から生まれた文化・うまいもん・川とともに活動し、まちづくりを行う NPO の方たちなど出会った人々をマップでご紹介します。
（スペースの都合ですべての皆さんをご紹介できなかったことをお詫びします。）

取材訪問市町村
お散歩紀行取材地点
伝統文化・産業
NPO 法人の方たち
移住してきた方たち
うまいもん
（数字は掲載号数、本マップ紹介地点は上記の色分け）

吉野川が育んだ伝統文化や産業

藍染（17 号）藍の館

江戸時代から明治時代中期にかけて、吉野川流域は全国一の藍の産地であった。藍住町には、日本でただひとつの藍の博物館『藍の館』がある。
ここには、連日国内外から多くの観光客が訪れている。藍染体験では、自分で持ち込んだ洋服や布を染められるのも人気だ。

▲藍の館

美馬和傘（4 号）

吉野川上流に今でも残る水防竹林。
旧美馬町の東部郡里地区では、古くから和傘作りが盛んだった。その和傘作りを復活、伝承しようと活動しているのが美馬和傘製作集団。工房は脇町うだつの町並みにあり、誰でもその和傘作りの工程を見ることができる。

▼藍染体験で染めた洋服

吉野川中流域に残る水防竹林

早明浦湖上流の眺め　大川村

流域に移住してきた方たち

町の皆さんの優しさに包まれています！

株式会社あしたのチーム三好ランド　西村 耕世さん（9 号）

大阪から、祖父母の住んでいた三好市へ孫ターン。
三好市にいても、東京や大阪と変わらぬスピード感で仕事ができているという。休日は家族とともに魚釣りや野菜作りなど田舎暮らしを Enjoy 中。サテライトオフィスの取り組みや移住者として田舎暮らしの楽しさや三好の良さを発信していきたいと語ってくれた。

つるぎ町地域おこし協力隊　榮 高志さん（21 号）

国内外からにし阿波を訪れる多くの人々を案内してきた榮さん。2018 年 3 月 9 日には、「にし阿波の傾斜地農耕システム」が世界農業遺産に認定。榮さんは、今年の春から『AWA-RE（あはれ）』を立ち上げ、にし阿波集落めぐりツアーなどの企画を行っている。にし阿波を徹底的に極めて、これからも世界とつながっていく。

にし阿波の魅力を世界に発信！

お茶やお米も作っています！

高知県 大川村役場嘱託職員　和田 将之さん（22 号）

緑のふるさと協力隊として来村。その後地域おこし協力隊を経て、村の嘱託職員として働いている。地元の女性と結婚して昔ながらの生活を大切に、仕事の休みには好きな農業に取り組む。自宅に石釜を作ったので、将来は来村した人にピッツァ作り体験など楽しい職を体験してもらう交流の場をつくりたいと夢は広がる。

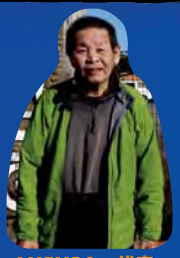
川づくり、まちづくり、NPO 法人の方たち

美馬体験交流の会
左から北岡 武義さん（理事長）、田中 義美さん、宮田 英治さん（4 号）

美馬市中鳥川公園の指定管理、四国三郎の郷の竹林の整備、水辺の楽校春まつり、竹の子狩りや竹灯籠イベントなど竹を中心とした町づくりを行っている。

正法寺川を考える会　会長
米田 博さん（17 号）

藍住町の中心を流れる正法寺川の美化活動に取り組む。合わせて、地元の藍住北小学校と連携して、正法寺川の環境学習に取り組んでいる。



AMEMBO　代表
藤川 雅仁さん（19 号）

子どもたちに吉野川の素晴らしさを体験させたい。そんな思いで活動している AMEMBO の皆さん。活動の中心となっているカヤック体験には、年間 2,000 人以上の人が訪れる。

新町川を守る会　理事長
中村 英雄さん（11、22 号）

フィールドの新町川だけでなく、上流の思いもよせて、精力的に活動する。「吉野川の魅力を知るのに、Our よしのがわは重要なツール」と語ってくれた中村理事長。

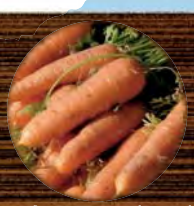
徳島じょうるりクルーズ
（写真提供：NPO 法人徳島ツーリズム協会）

吉野川がうんだうまいもん

GOTTSO 美～ナス（3 号）
阿波市の若手農業者グループ「GOTTSO 阿波」の皆さんが作る翡翠色した白ナス。火を通すと、とろりと柔らかい食感になる。

半田そうめん（7 号）
吉野川を行き来する平田船の船頭がその製法を伝えたとされる。強いコシと喉ごしの良さが特徴。

スジアオノリ（8 号）
吉野川下流で行われる養殖風景は、冬の風物詩。良質な吉野川の漁場で養殖されるスジアオノリは、美味しくて香りもよい。



春にんじん（10 号）
吉野川下流藍住町や板野町を中心に作られている春にんじん。生産量、出荷量ともに日本一。甘みたっぷり。

なると金時（16 号）
なると金時松茂美人。松茂町の農家全体の約 7 割がさつまいも農家だ。吉野川河口域の砂地地域で伝えられている。

れんこん（18 号）
鳴門市大麻町のコウノトリの営巣地でコウノトリと共生した農業に取り組んでいる方たちが作るコウノトリれんこん。

土佐はちきん地鶏（22 号）
高知県畜産試験場で平成 17 年に開発された。高知県大川村では、平成 21 年から村の新しい産業として飼育に取り組んでいる。
（写真提供：大川村役場）

Delicious
yoshinoriver

編集部の思い

ふるさとの象徴でもある吉野川。先人たちは洪水にも苦しめられながらも、たくましく、日々の生活を営み、豊かな農産業や文化が発達してきました。
取材を通して、吉野川が命の源であるということを強く感じました。
もしも吉野川がなかったら、人々の暮らしはどうなっていたのだろう、そんなことを思うことがあります。
これからも吉野川をとりまく魅力を「人」と出会って、さらに知り、学び、お伝えできればと思います。